

速報：モニタリングサイト 1000 陸水域調査（湿原）植生調査

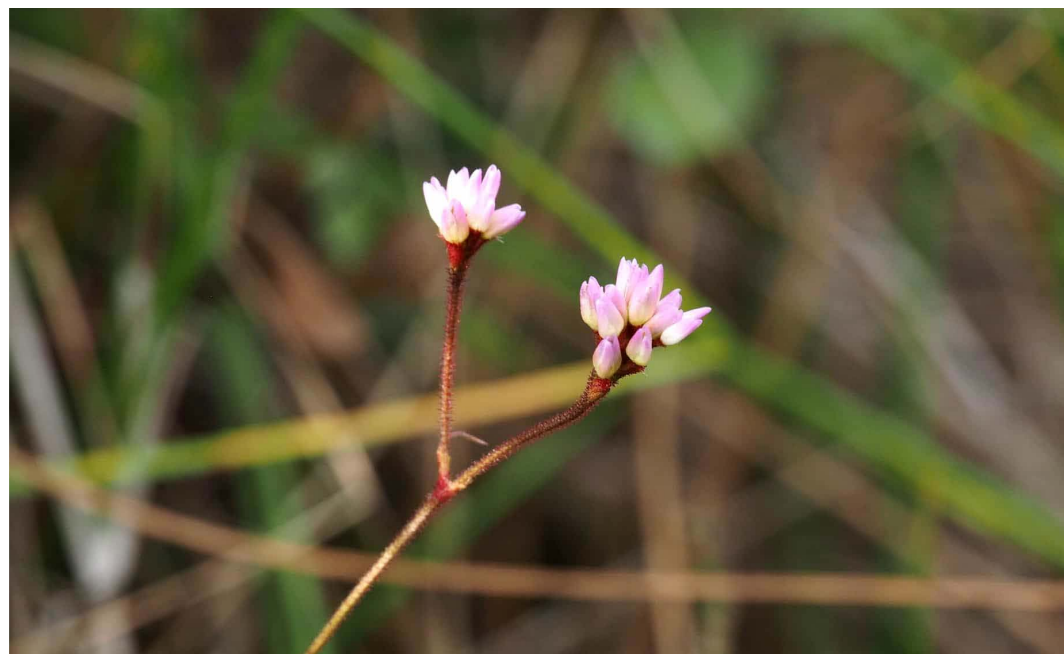
釧路湿原 サイト

－北海道阿寒郡－

釧路湿原は釧路平野に位置する日本最大（18,290 ha）の湿地帯です。海水面が高かった約 6,500 年前に深い内湾となっていたところが現在の釧路湿原になったとされています。特別天然記念物であるタンチョウの我が国における主要な生息地であり、湿原内を流れる釧路川やコッタロ川などには国内最大の淡水魚イトウが生息します。湿原の大部分はヨシ・スゲを主体とする低層湿原やハンノキ林ですが、温根内赤沼周辺及びキラコタン岬の南方にはミズゴケを主体とする高層湿原が発達しています。



チャミズゴケ（写真中央の小型のコケ）とムラサキミズゴケ（その周りの紫色のコケ）。他にツルコケモモやスギゴケが見えます。



ナガバノウナギツカミの花。釧路湿原では比較的最近に確認された種です。同属の他の種よりもエゾシカの攪乱に強い種であるようです。

2016 年度の調査結果概要

釧路湿原サイトの 2016 年度の植生調査は 9 月 12 日から 14 日にかけて実施しました。調査は 2009 年度に開始し、今年度で 6 回目となります（2009、2010、2011、2012、2013、2016 年度）。植生調査の結果は、全体としてはこれまでの調査結果と比較して大きな違いは見られませんでした。全 20 方形区のうちの 1 区において優占種であったヨシがほとんどなくなるという大きな変化が起きました。原因を断定できる証拠はありませんが、周囲の状況からエゾシカの採食または攪乱によるものと思われます。このヨシの減少が、ここ数年の継続的な現象であるのか、それとも今年 8 月の台風で湿原が増水し、調査地付近のエゾシカの密度が一時的に高くなった（かもしれない）ためかは判断できません。高層湿原やスゲ低層湿原・ハンノキ林では大きな変化はありませんでした。次の調査は 2019 年度に実施する予定です。

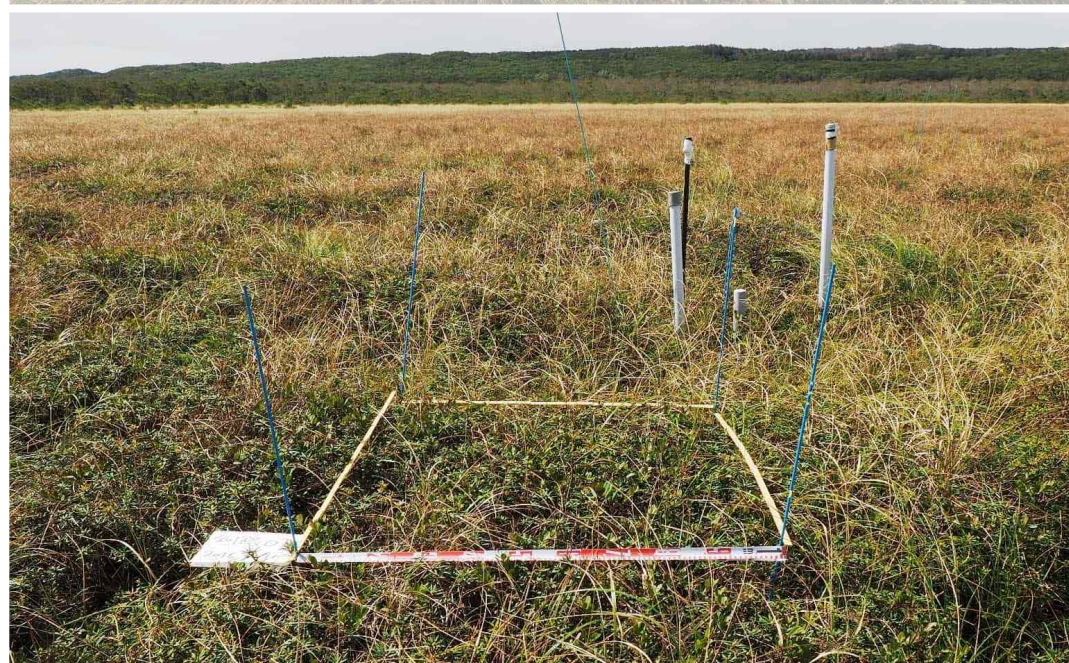
【調査者・調査協力者】
佐藤雅俊（帯広畜産大学）・野原精一（国立環境研究所）



ホソバアカバナの花。調査開始の 2009 年度には開花がほとんど見られませんでした。今年度は数個体の開花を確認できました。



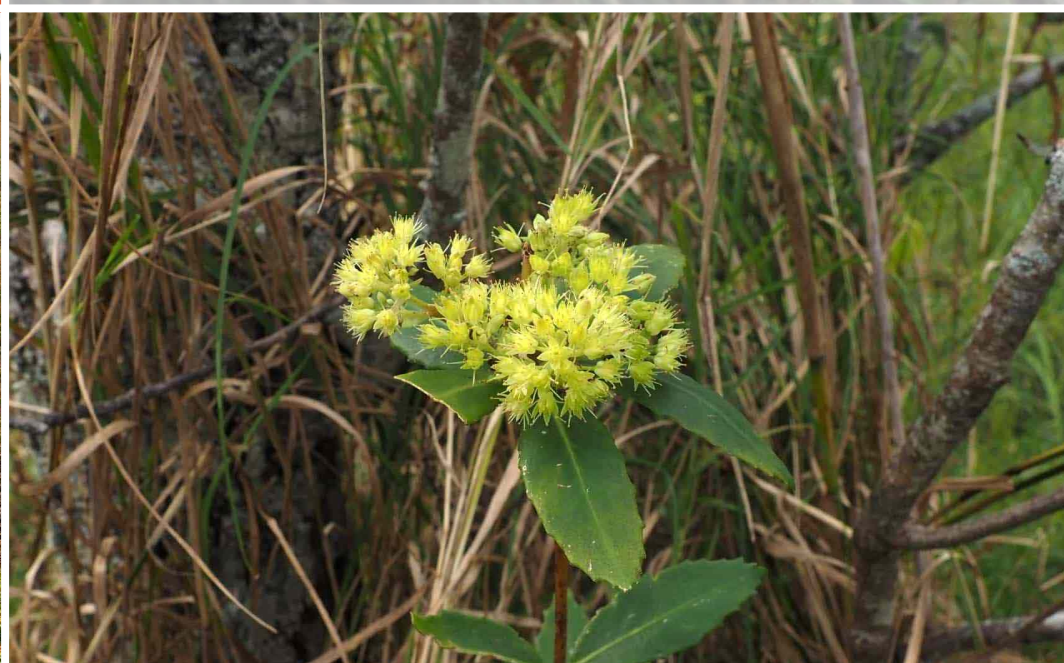
調査地のうちの、高層湿原植生・チャミズゴケ区周辺の景観。カラフトイソツツジやホロムイスゲなどの草本植物の下に、チャミズゴケが密生しています。



調査地（方形区）の様子。チャミズゴケが傷まないよう、崩さないように、慎重に調査を行う必要があります。



エゾシカのヌタ場跡に定着したワタスゲ（裸地の上の株）。2008 年度に調査地付近で確認されたヌタ場で、徐々に裸地が覆われつつあります。



ミツバベンケイソウの花。エゾシカに食べられた茎をよく見かけます。2010 年頃にはほとんど花が見られませんでした。今年度は数個体の開花を確認できました。

速報：モニタリングサイト 1000 陸水域調査（湿原）植生調査

八幡平 サイト

ー岩手県八幡平市ー

八幡平は、岩手県、秋田県に広がる奥羽山脈北部の山塊であり、山頂部が広く平坦なことから、「平」という名前が付けられています。火山現象と多雪によって生み出された数々の湖沼や湿原には、標高差や残雪の影響等により様々な植生が見られ、多様な生態系が形作られています。本サイトでは、八幡平山頂付近に位置する八幡沼の周囲に広がる湿原（八幡沼湿原）、並びにその東方約 2 kmに位置する黒谷地湿原に調査地をそれぞれ設置しています。これらの湿原では、観光者等の踏みつけによる植生の荒廃や裸地化が問題となり、湿原の保護が行われています。



エゾオヤマリンドウ（八幡沼湿原）。



樹上に設置した気温計パイプ（黒谷地湿原）。

2016 年度の調査結果概要

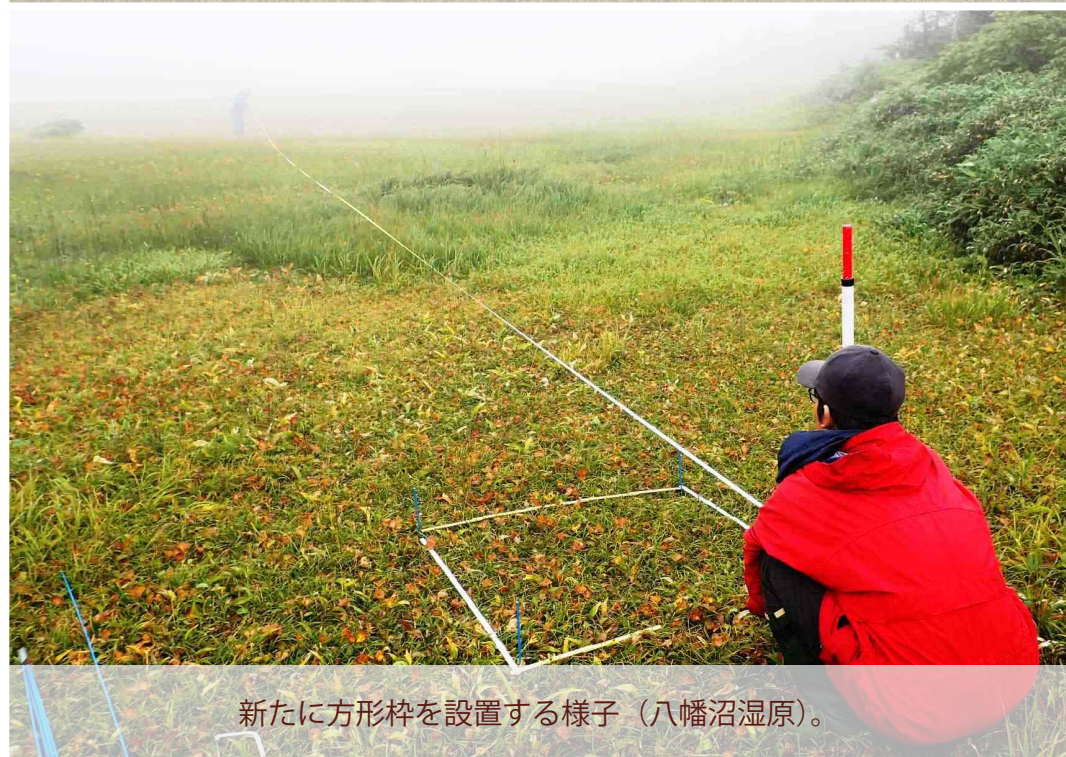
八幡平サイトは、今年度より新たに加えられたモニタリングサイトです。8月29日、植生調査を行う方形区と、物理環境（地下水位、気温、地温）の自動測定機器を、八幡沼湿原と黒谷地湿原に設置しました。八幡沼湿原にはライン A（12 方形区）を設置し、黒谷地湿原ではライン B（11 方形区）とライン外の 3 方形区を設けています。9月3日に植生調査を実施し、さらに 10月14日にコケ類を詳細に把握するための追加調査を実施しました。

八幡沼湿原（ライン A）では、ショウジョウスゲやイワイチョウが優占する様子が湿原周縁部で見られ、ライン中央部に向かってヌマガヤやミヤマイヌノハナヒゲの優占度が高まり、また、イボミズゴケやワタミズゴケの厚いマットが発達していました。黒谷地湿原（ライン B）でも、ライン A に似た植生が見られましたが、中央部の微傾斜地ではシモフリゴケが広がり、平低部の大部分はワタミズゴケのマットでした。また、小さな池塘の頂部ではスギバミズゴケ、浮島状泥炭地（ゆらゆらした浮いた泥炭の塊）や滞水する凹地ではヤチスゲがそれぞれ優占していました。八幡沼湿原と黒谷地湿原では、荒廃した植生も報告されていますが、今回調査したラインは自然の植生が保たれていました。

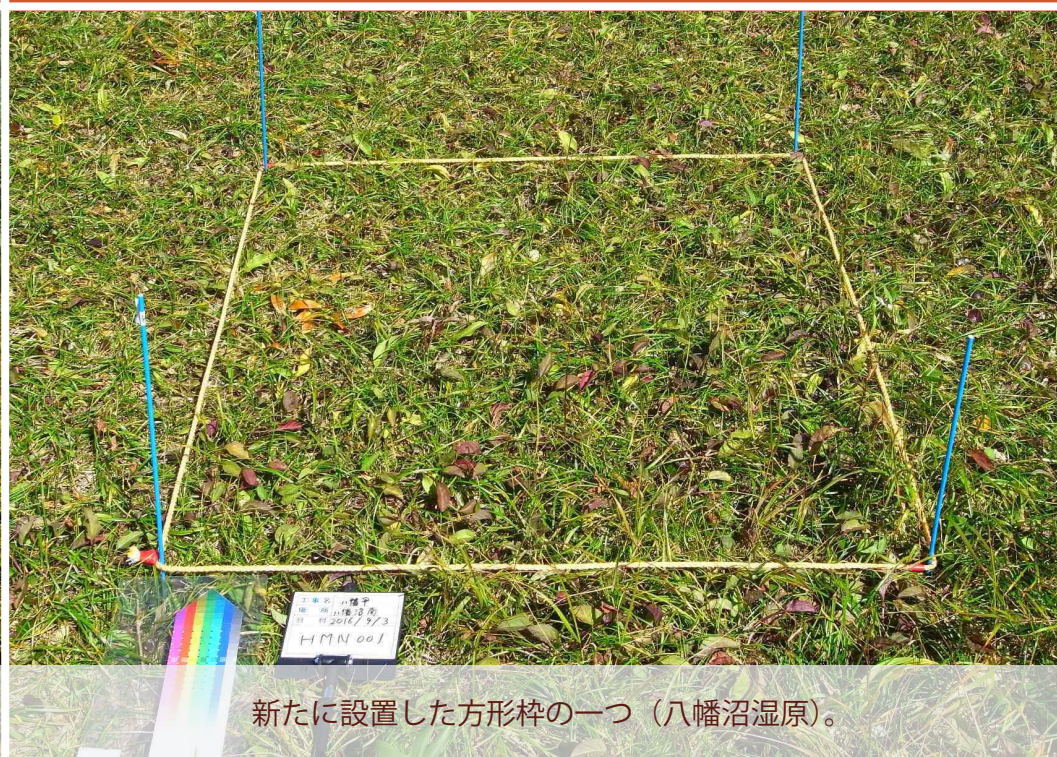
【調査者・調査協力者】竹原明秀・佐藤弘一朗・寺澤祐樹（岩手大学）、横山正弘（宮城植物の会）、加藤 将（日本国際湿地保全連合）



シモフリゴケ（黒谷地湿原）。



新たに方形枠を設置する様子（八幡沼湿原）。



新たに設置した方形枠の一つ（八幡沼湿原）。



イボミズゴケ（黒谷地湿原）。

速報：モニタリングサイト 1000 陸水域調査（湿原）植生調査

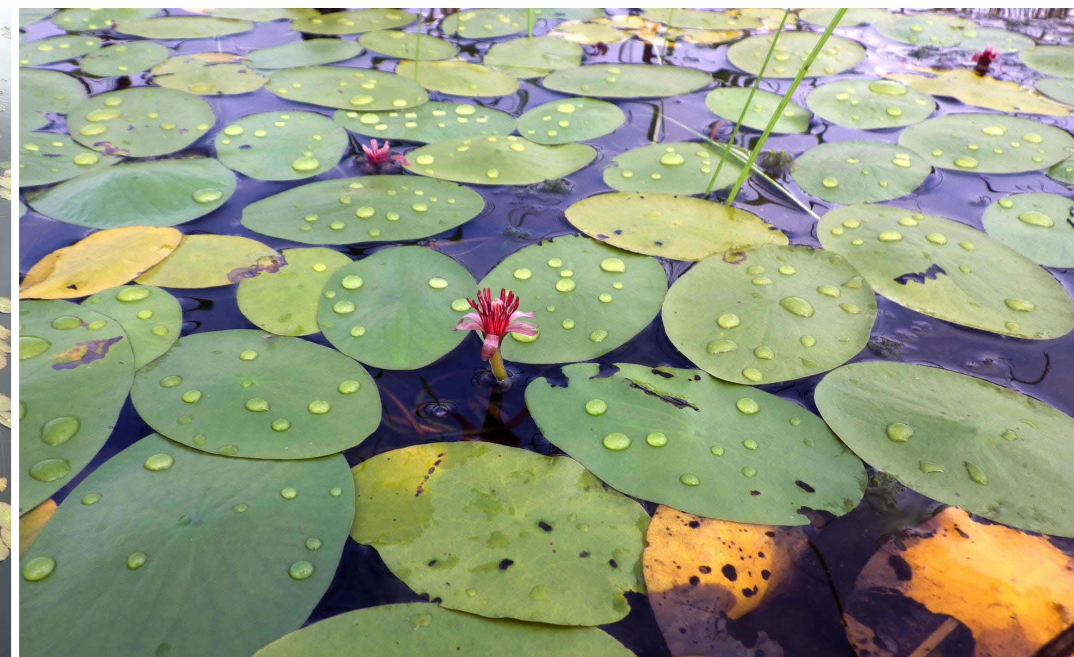
尾瀬ヶ原湿原 サイト

ー群馬県利根郡ー

尾瀬ヶ原湿原は、群馬県、新潟県、福島県の3県にまたがる面積約760haの本州最大の山地湿原群です。周囲を燧ヶ岳、至仏山など2,000m級の山々に囲まれた盆地の標高1,400m付近に位置し、1年の半分以上が雪に覆われる豪雪地帯にあります。湿原内ではゼンテイカやミズバショウなどの多様な湿原植物、流路に沿ってハルニレやサワグルミ、周縁ではダケカンバなどの高木が見られます。本サイトでは、湿原内の中田代地域（群馬県）に調査ラインを設定しています。



池塘内のヒツジグサ。



ジュンサイ。

2016 年度の調査結果概要

植生調査を8月17～18日に実施し、さらにコケ類を詳細に把握する追加調査を10月18～19日に実施しました。尾瀬ヶ原湿原サイトでは、これまで2010・2013年度に植生調査を実施しており、今回は3回目となるため、この6年間の植生の動きが確認されました。調査ラインに設置している23方形区において、全体的な植生の相観に大きな変化はなかったものの、植生高の平均は前回より増加し、コケ層の植被率はやや減少している調査結果が得られました。乾燥によってキダチミズゴケが枯死し、優占種が変わった方形区もありました。シカやカモシカなどの哺乳類による植生への被害は方形区内では確認されませんでした。調査ラインの周辺で、採食の形跡、ヌタ場、けもの道が見られ、植生への影響が危惧されました。コケ類は、過去2回の調査で約15種が記録されていたのに対し、今回の調査により22種が確認されました。次の調査は2019年度に実施する予定です。

【調査者・調査協力者】竹原明秀(岩手大学)、樋口正信(国立科学博物館)、安類智仁・小林慎治(片品・山と森の学校)、佐藤雅俊(帯広畜産大学)、野原精一(国立環境研究所)、横井謙一(日本国際湿地保全連合)



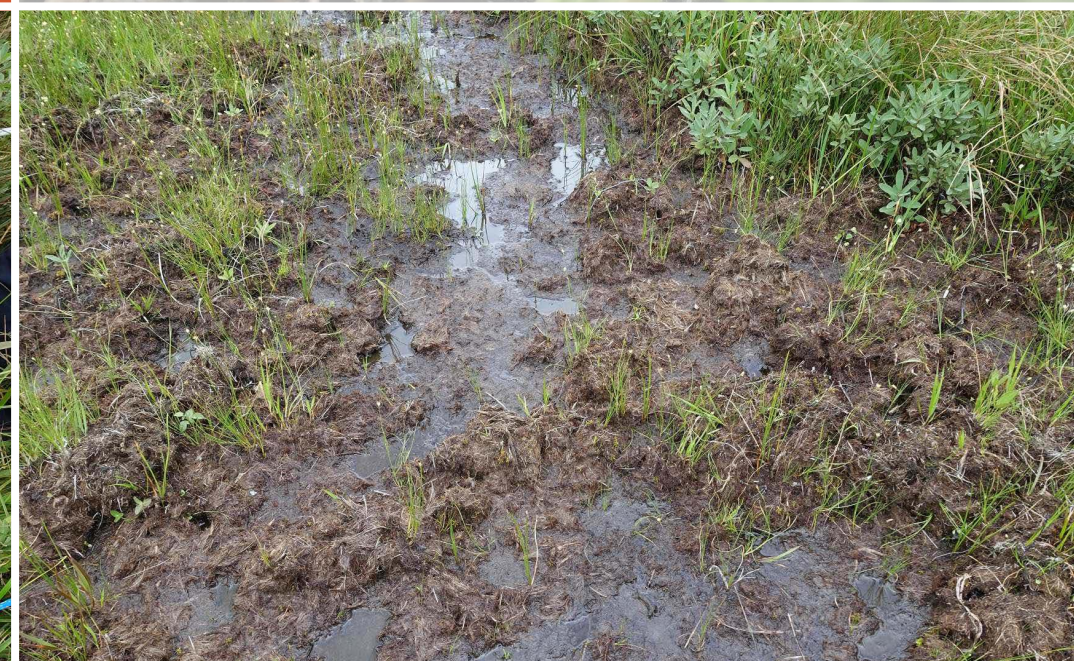
コサンカクミズゴケ。



調査ライン付近の景観と調査旗。



方形区内の植生調査の様子。種ごとに被度と草丈を記録します。



新しいシカのヌタ場。ホシクサ類やイヌノハナヒゲ類が生育していました。



設置している方形区のメンテナンス（杭の交換等）も行っています。